

復・充実を図ろうとするもう一つの国の政策と矛盾することになる。

さらに政策の狙いである教育の個性化・自由化の実現と引き換えに、国民の教育水準の多様化と低下がもたらされる可能性が高いと警告する。

こうした公教育制度を揺るがす自由化の流れとそれに関係した改革に対して、著者はダニエル・ベルの社会を発展させる中軸原則「効率・平等・自己実現」を紹介し、それに「共生」という価値を加え、コミュニティを重視した教育制度を考えるべきだと主張している。

国が提起する政策に対し、目先の是非だけでなく、教育システム全体との関連とその整合性や外国の教育改革の動向との比較などにも目を配り、自由化・多様化を促進させる改革の構造を批判し、それに代わる教育改革の「条件」をも提示した著者の主張は、現在の教育改革論議に新しい視野と論理を持ち込んだものとして評価できる。

いまの教育改革に積極的な批判の論理や根拠を持てないまま、しかし違和感や不安を抱いている人たちにとって、本書

■ 書 評 ■

ましこ ひでのり 著

『イデオロギーとしての「日本」―「国語」「日本史」の知識社会学―』

関西学院大学 清矢良崇

本書は、東京大学大学院教育学研究科に提出された氏の学位論文を加筆・修正したものである。「イデオロギー」という問題に疎い私のような者が、本書の評者

は改革を考える上で刺激的で、教えられることの多いものとして歓迎されるのではないか。

また教育政策への関心を高めるには、著者のように社会に向けて、政策に対する論理的な批判を展開し、それによって市民の関心を刺激し、さまざまな場で政策に対する意思表示を行うよう促すしかない。

ただ気になるのは、本書の読みやすさにやや欠ける点である。文章は明快、節ごとの論旨もわかりやすい。ただ全体の内容が教育改革の検討だけでなく、教育のありようとか教育の構造と機能についての叙述に分かれ、その間の関係が理解しにくい。叙述の量や論旨からみて2冊の本を1冊に詰め込んだ印象を拭えない。「教科書」ならこれでいいのかもしれないが、新書としてはいかがなものか。評者はメモをとりながら再読し、なお本書を自分のものにしたという実感が湧かなかった。

◆岩波新書 258頁 630円（税別）
岩波書店

として必ずしも適切でないことは明らかであり、たいへんな力作である本書の多岐にわたる論旨すべてに、適切なかたちで論評を加えるような読解能力など、と

でも持ち合わせていない。しかし、私があえて本書の書評をお引き受けしたのは、「日本文化」を一つの研究対象にしている者として、自分自身を見つめなおすよい機会だと思ったからである。

一読して、まったく反省させられる点ばかりであった。というのは、本書の根本的な問題意識の一つが、(私がその恰好の例であるような)自分では政治的に無縁な立場で発言しているつもりでいる人たちの「言説」のなかに、厄介なイデオロギーが隠されているという事実を指摘することにあるからである。本書の中心は、第2章「イデオロギーとしての国語」、第3章「イデオロギー装置としての日本史」、第4章「イデオロギー装置としての学校教科と周辺知識をこえて」という三つの章であると思うが、「常識」に安住していることの恐ろしさに気づかされる鋭い論点が随所に散りばめられており、「日本」「日本文化」という言葉を安易に使うという私自身の、まさに「みにくい自画像」を見せつけられる思いであった。

第2章では、「国語」「日本語」「標準語」「共通語」などの概念が、いかに困難な問題を孕んだものであるかが、詳細に議論されている。しかし、この章の主要な論点の一つは、「漢字システム」の「イデオロギー性」「権力性」の問題であり、これが再生産論や知識社会学における言語論から「すっぱり」ぬけおちているという氏の指摘は、確かに正鵠を得たものであると思う。また、興味深かったのは、「モジはオトの転写手段」という前提を批判するポスト・モダン系の議論に対す

る氏の批判である。「言語学者／教育学者の健全な協力関係が、“モジはオトの転写であるべきだ”という理想をおいもとめる民主化運動だった」という事実を彼らが見落としており、「かきことばは、はなしことばにかぎりなくちかづいていくべきだ」という志向性に逆行するようなポスト・モダン系の議論は「貴族主義的な」発想である、などの視角からの氏の痛烈な批判は、「生の会話」をデータとしてきた私にとっても共感できる部分が多い議論であった。

第3章では、教科としての「日本史」のイデオロギー性を、高等学校の教科書の記述分析を中心に論じているが、そこで行われているところの、従来の「教科書問題」の視角とは異なる氏独自の論点は、「日本」というものの同一性を疑うことのない日本史記述が、実は「歴史教育を批判的に検討し、向上させようとしてきた知識人」自身の記述の中にも同様に指摘できるという事実、さらに、彼らの「反動イデオロギーとたたかっているというセルフ・イメージ」のために、彼ら自身の認識に潜むイデオロギー性が自己点検されないという事実こそ、イデオロギー装置として「日本史」の問題性の本質があり、戦前に見られたような教育の「ファナティズム」の結果でも文部省の検定による圧力の結果でもないという指摘である。私の印象では、このような諸事実をとらえる氏のまなざし、氏自身の言葉を借りれば、「本論考が対象化してきたのは、執筆者自身が政治性をおそらく自覚せずに、結果として政治性をおびた記述を再生産している実態であ

る。文部省検定で話題にのぼらない政治性こそ、深刻かつ本質的な問題をはらんでいると認識したからである」という視角が、氏の議論、そして本書全体の魅力を支えていると思われる。また、このようなまなざしは、(私のように)氏の関心領域に必ずしも接点を持たない研究者にとっても、本書で行われている「隠れたイデオロギー性」批判に自らの感覚をさらし、それを相対化するという作業をするうえで、たいへん有益であろうと思われる。

しかし、そのような隠れた「神話」を乗り越えるために氏が提示している処方箋は、かなり厳しいもののようである。「いま／ここ」を生活者の実感として認知し、しかも「歴史的なとらえかえし」によって固有の文化を象徴的な中核にし、一方で、歴史幻想にとらわれないように「しなやかさ」も必要であり、また、「過去」とも「現在」とも異質であるという自己主張と同時に、「いま／ここ」を相対化する通時的視点もかかせないとする氏の要求(第4章)が、「実践的な」課題

としてどのくらい実行可能なものかという点に関しては、私には適切に判断する能力がない。ただ、そのような要求が、たとえば会話分析という作業の中で、記述者としての自分自身を見つめる一視点として重要であると思ったことは事実であり、また、「これまで自明視されてきた教科のわくぐみを、根底からとらえかえずとりくみのためには、教育学者、なかでも教育社会学徒が、言語学者／メディア論者や、図書館情報学、また歴史文献の専門家(歴史学／文学)と協力して、具体的提言をすべきだろう」という氏の提言が、教育社会学における新たな研究テーマを模索している人々にとって参考になるだろうと思ったことも事実である。以上のように、研究者としての自らを相対化する意味でも、そして今後の教育社会学研究の豊かなフィールドを示唆しているという意味でも、本書は、多くの研究者に刺激を与えてくれる研究であると思う。

◆A5判 336頁 3,200円(税別)

三元社